平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

（R6.８）

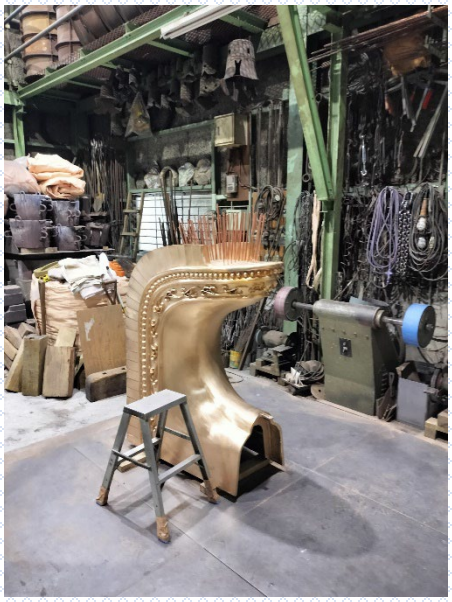
奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場

～現場の今（工事進捗報告）～

「甍（いらか）の波と雲の波　重なる波の　中空を～♪」（童謡：鯉のぼり）

この歌に出てくる甍とは、瓦葺き屋根のことを示し、大海原に見立てた大空には、雲のように様々な波と共に美しく揃った瓦の（斜めの）線のように、統一された雁行のきれいな波が表現されています。平城宮跡の大海原にも新たな甍を作り出すべく東楼の瓦葺きのための準備作業が進められています。

瓦屋根の両端に取り付けられる鴟尾（しび）の製作も始まっています。靴のような形をしていますが、唐の時代に魚の形に変化したといわれており、後に鯱（雨を降らすインドの空想の魚）へ変化したとも伝えられています。（諸説あり）



製作中の東楼の鴟尾

姫路城のしゃちほこ（右）

大極殿の鴟尾（右）

参考

この鴟尾や鯱が屋根に載っている理由は、元々は天災から守る魔除け（魚が水面から飛び出して水をかけている様）と言われており、避雷針のない時代には避雷針の代わりとも伝えられています。

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料

(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)

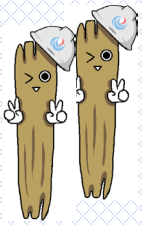
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

場所　　申込み

平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

（R6.８）

奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場



これまでの～現場進捗～

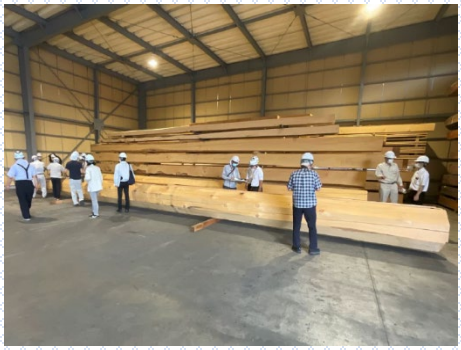
2022年7月　(掘削工事)

掘削工事試掘・奈良文化財研究所立会

掘削（手掘り）

掘削工事　完成

2022年８月～9月（木材搬入）



木材検品・側柱

木材検品・組物（斗）

柱加工状況（チョウナ）

2022年10月～11月（原寸図検討・木材検査）

瓦原寸図大棟確認[加工・原寸場]

瓦、鴟尾原寸図確認

木材本検査

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料
(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

場所　　申込み

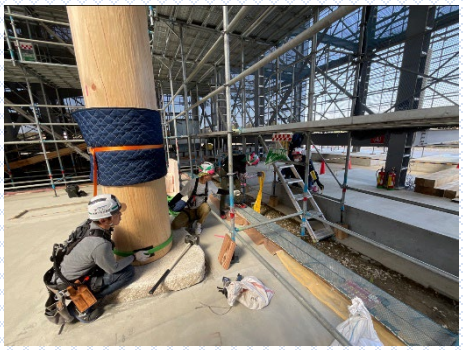
平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

（R6.８）

奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場

2023年3月　(外周柱加工)

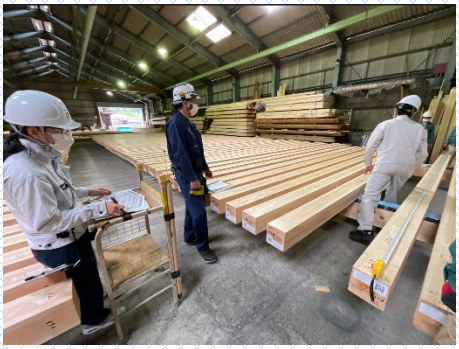
外周柱･槍鉋加工



礎石と柱脚の光付け

階段石確認

2023年4月～5月



木材本検査[垂木など]

瓦生型確認

外周柱･仮据え付け

2023年5月～6月

上部構造補強鉄骨フレーム

左官土練り場造成

床桁、胴差、壁止建て方

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料
(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

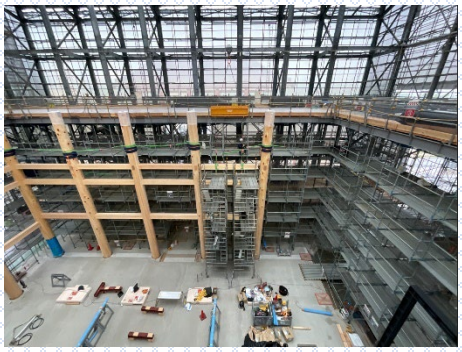
場所　　申込み

平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

（R6.８）

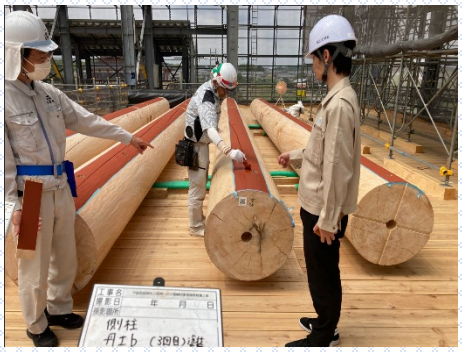
奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場

2023年６月



床桁、胴差、壁止組立

外周柱　組立状況

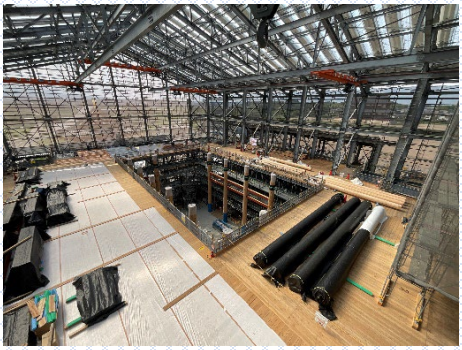


外周柱、丹土塗装

2023年8月

瓦製作

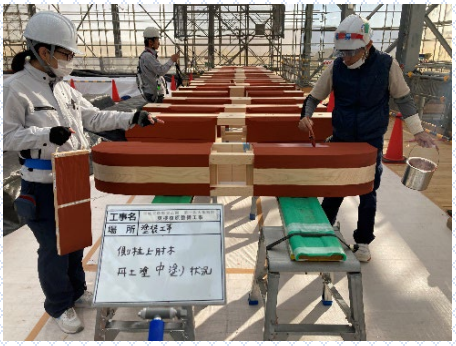
荒壁土　製作



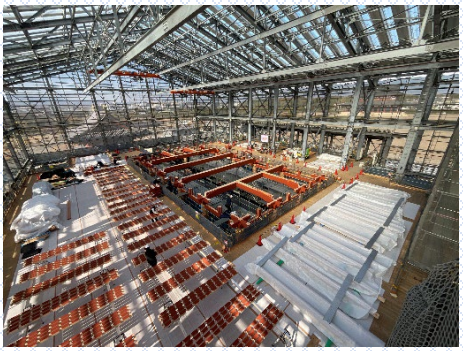
木材組立状況

2023年9月～12月

木材組立て



側柱上肘木　塗装



木材組立て

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料
(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

場所　　申込み

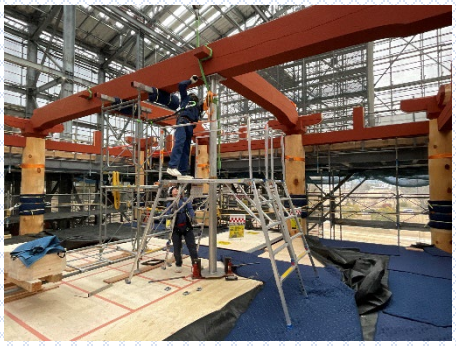
平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

（R6.８）

奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場

2024年１月～３月

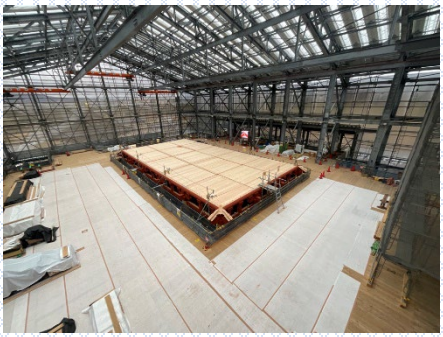
束柱組立



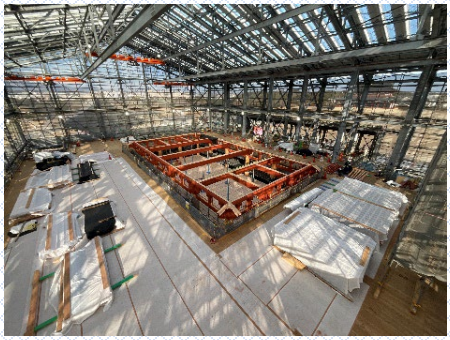
束柱組立

天井格子取付

2023年3月～4月



天井格子取付け完了



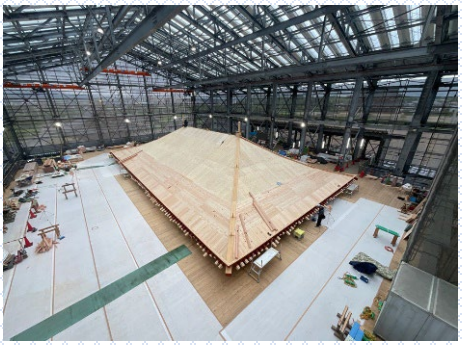
屋根組　組立て

上棟

2023年4月～6月

鴟尾製作

地垂木選別



屋根工事

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料
(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

場所　申込み

平城宮跡・東楼復原工事　現場だより　第20号

奈良時代を今に感じる　伝統技能の継承現場

～時を営む、時を繕う（現場担当者コラム）～

　古来、東洋の五行説では、木・火・土・金（石）・水の五つの元素から万物は組成されるといわれています。平城宮跡の大極殿の縁側（ベランダ）には五行説を模したようなオブジェが飾られています。

平城宮跡歴史公園で復原された建物を前にしたとき、この自然のエッセンスを感じながらも日本の建築様式初期の移り変わりが分かる現場なのかなと思いました。

　日本古来の建築は伊勢神宮をはじめ「掘っ立て柱」構造で、柱が腐ったりと傷んできた建物を更新する継続性を行う形式でした。奈良時代以降、中国より永遠性を求める「礎石の上に柱を建てる工法」が取り入れられ、この東楼ではその両方が採用されています。その理由は今となっては色々な見方があり想像が膨らみます。

　さて建築の様式とは建物のカタチのことで、建築の基本要素である構造、平面、造形について一つの独特の形式が認められる時、スタイル（様式）が成立していると判断されています。

色々な書物にも記されていますが、欧州では「ギリシャ、ローマ、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック、ロココ」というように建築の歴史はスタイルの歩みとして語られ、住宅も教会も役所も王宮も城も形を変えて変遷していきます。

しかし、日本では飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・江戸様式というように時代毎に様式を区切って語ることはなく、唯一神明造、春日造、茶室、書院造や数寄屋造・・・等々。

唯一神明造（千数百年）、茶室（千利休が今の型を決めてから守り続けて四百年）と日本では一度成立してしまうとその建築様式は、現在も生き続け、かつ、併行して古いものも生き続けます。数寄屋が生まれても、書院は残ります。

理由は、様式（スタイル）が、欧州のように時代に従属せず、日本の建築様式は『用途』に従う特徴から受け継がれているともいわれています。

日本の古墳時代は、ローマ帝国末期に当たります。伊勢神宮は今でも平然と当時のスタイルで作り続けていますが、現在のキリスト教において、古代ローマ様式で作り続けているなんてヨーロッパ人は想像もできず、新築でローマ様式を選択することはないといわれています。

しかし、日本では求められる用途の器を作るために建物を作りますので、唯一神明造（伊勢神宮）をつくって（遷宮）いるし、日本人に変える想像は出来ないといえます。

時代と共に、用途が増える度に、古いものも残りながら、新しい様式が増え続けるのが日本の建築様式となります。しかし、使用する機会がない機会がない、すなわちその用途がないとその建築様式は（そのままでは）残らない。つまり建築様式を支えていた当持の技術も（そのままでは）材料も使用する機会がないことから残らず併せて消えていきます。

　この現場では、これまで脈々と受け継がれていた技術をエッセンスだけでも若い職人の方々に伝授していく機会になれば良いな…と願っています。

昨年度から発行しました現場だよりも20号を迎えました。引き続き、現場状況を発信できればと思っております。

～魅せる！現場（工房編：山本瓦工業）を開催！～

2024年 9月26日　定員20名　学生向け　無料
(奈良県生駒郡平群町椣原５２０－１)
https://www.kkr.mlit.go.jp/kengaku/moushikomi/moushikomi.html

場所　　申込み